

高知憲法速報

No.238 2010. 10. 7

発行:高知憲法会議事務局 088-872-3406

編集人 事務局 徳弘嘉孝

「人間の目で経済を見よう」品川正治講演 10・2

10月2日高知県革新懇総会で、経済同友会終身幹事・革新懇代表世話人の品川正治さんが「人間の目で経済を見よう」と題して講演しました。86歳の高齢ながら2時間の熱弁でした。講演要旨を紹介します。

最初の22年は天皇の臣民として、後の64年は主権者日本国民として「一身にして二世を生きて」きた。

初めの22年は戦争の時代、京都の三高に入学した時は太平洋戦争が始まっていて、学生の徴兵猶予がなくなった。あと2年ぐらいしか勉強できない覚悟をしてその間に何をすることが課題だった。カントの「純粹理性批判」を原書で読み終えたいと決意し、ドイツ語の文法を1学期で教わり、翌年の秋読み終えた。その10日後に召集令状が来て、高等学校2年生の秋に鳥取の連隊に入隊、2週間の訓練で戦地へ。黄河を渡って西へ西へと行軍、延安に最も近い部隊だった。今日は重慶政府軍と、明日は八路軍と戦うという最前線。迫撃砲の直撃を受けて空中に吹き飛ばされ数時間意識不明、死んだと思った。今も足に破片が残っている。隣の壕にいた戦友が「助けてくれ」というのを助けられなかったことは長い間のトラウマで家族にも話せなかった。8月15日以降も国共内戦で武装解除とならず、3ヶ月は戦闘状態にあった。隣の山西省の部隊はこの3カ月の戦闘で数百名が戦死しているが「日本の戦争ではない」として軍人恩給も付かず、靖国にも入っていない(経過は「蟻の兵隊」に詳しい)。私たちの司令官はハーグ条約などを指摘して堂々と交渉し、小火器も使わず11月20日ごろに武装解除された。

1946年に山口県に復員、船で帰省の待機中に新憲法草案が載った新聞が届けられて、皆で読んで感激した。戦争を「国家の目」でなく「人間の目」で見ている。このような成文憲法を持つ国はほかにない。「戦争を起こすのも人間、それを許さず止めるのも人間」は一生変わらない座標だ。自分はどちらの側に立つのか。抵抗するのか否かを考えなければならない。

2008年9月リーマンブラザーズがつぶれ、アメリカ

金融資本の支配が揺らいだ。日本は戦争をしている国・アメリカと価値観が一緒で良いはずがない。アメリカのS&B・500社のCEOは給料の平均が一般労働者の340倍、ヘッジファンドのトレーラー50人の平均給料は19,000倍だ。アメリカ流がよいとは言えない。核の傘に入っていて核はなくせない。安全保障とは何か。憲法9条と安保はどちらが上か。もうごまかされてはならない。一人一人が主権者の自覚を持つこと。国債の95%は日本の家計部門が持つ、郵便局や銀行の預貯金が国債に回っている。企業は内部留保を返していくべきだ。日本が変わればアメリカも変わる。100人いれば大仕事ができる。土佐から変えていこう。

「アフガンの今を知る」西谷文和講演 10・3

「草の家」「未来の会」「平和を考える市民セミナー」が共催して、フリージャーナリスト・西谷文和さんの講演会があり、西谷さんは映像も交えてイラクとアフガンの現状を語りました。講演の一部を紹介します。

カブールの難民キャンプには1500人がいるが電気も水道もなく衛生状態も悪い。食糧も少ない。米軍は「誤爆」を繰り返し、多くの民間人が殺されている。500万個以上の地雷が埋められており、両足を失った人も多い。女性は教育も制限されてきたので女性の医者が極端に少なく、男性医師には診てもらえないので女性の被害者は助からない。鳩山内閣は50億ドル(約4500億円)の支援を決めたが、空港への道路、上下水道、電気ガスなどの工事がアフガン復興費から支出され、結局は援助が軍事のために使われる可能性が高い。自己責任論でマスコミが入らず情報が少ない。一人のタリバンを殺すための攻撃で19人の民間人が死に、ニュータリバンが10人生まれている。無人機プレデターによる攻撃はアメリカ本土から衛星を通じて制御され、ラスヴェガス近くから通う兵士が画面を見ながらテレビゲームのように人を殺している。PMCと呼ばれる民間の請負業者が増えた。米軍との共同作戦、ロケット弾押収、イラク軍の教育、政府要人やジャーナリストの輸送など何でもやっている。戦争の民営化が進んだ。PMCを傘下に持つカーライルグループの重役はパパブッシュやサウジの富豪らだ。イラク戦争への協力についてオランダやイギリスでは検証委員会ができたが日本ではできていない。劣化ウラン弾の影響と思われる口蓋裂なども増加、何よりも平和の回復が急がれる。アフガン人は日本が好き人が多い。